

第7章 多様性の中の統一 ～インドネシア～

この旅行の後、私は旅に無感動になった自分に気づく。

7.1 プロローグ

正月は実家でごろごろしようか… そう考えていた。しかし年末休みが近づくとつれ、また私の中で旅の虫がさわぎ始めた。

インドネシア。カンボジアのアンコールを見た後とても気になっていた遺跡、ボロブドゥールのある国である。寮で新川さんと飯を食いながら話していた時に、にわかにも今回の旅行先として浮かび上がった。新川さんはインドネシアに行ったことがある。いろいろ聞いていると、やはりボロブドゥールを見に行かなければという気になった。その後、駅前のブックセンターでインドネシアのガイドブックを買ったが、ほとんど開きもしないまま数日が過ぎた。

10月ごろから私の頭の中は仕事でいっぱいになっていて、なかなか他のことをゆっくりと考える余裕がなかった。そのため今回はチケットの手配も遅く、旅行会社に電話したのは出発の約1週間前、12月19日(土)であった。直前だから無理ですと言われても仕方ないという覚悟で電話すると、意外にも好感触。デンパサール往復ではなく、ジャカルタ往復ならなんとか取れそうである。本当は、ジャカルタから入ってデンパサールから出るというのをやりたかったのだが、デンパサールの方を取るのがやはり難しいらしい。

22日(火) チケットが確保できた。これで、土曜日にはもうジャカルタだ。出発の前日である金曜日、入社前に小倉の第一勧銀へ行ってT/Cを買った。円高なので、今後の旅行用も含めてUS\$300買っておいた。ろくに旅行準備もしていないが、とりあえずパスポートと金があれば大丈夫だろう。ガイドブックもほとんど読んでいないが、入国してからどうするかは、移動中に決めればよい。会社では、新川さんからRp(ルピア)札を何枚かもらった。以前、インドネシアに行った時の残りだそうだ。

外務省の海外危険情報で、バリ島以外は危険度2「観光旅行延期勧告」が出ているのが少し気になる。しかし出されたのは11月だ。まあ、選挙の日程も決まったことだし、正月ぐらいは落ち着いているだろう。

その日、寮に帰ってきたのは夜中の2時ごろになってしまった。遅い夕飯をとり、それから洗濯をし、洗濯物を乾燥機に入れた。このところ洗濯していなかったのも、Tシャツや下着がもうないのだ。朝までには乾くだろう。とりあえずその他の荷物をリュックに詰

め込み、後は衣類だけを入れれば良いようにした。そして年賀状書き。毎年のことではあるが、もっと早くやっておけば良かったと思う。旅行前夜に書き始めるとは。明日の自分は、もうジャカルタの宿で眠っていることだろうとなどと考えながら全てを書き終えたころ、窓の外はもう明るくなり始めていた。徹夜か …。

7.2 首都ジャカルタ

7.2.1 ニュースで見た街 1998年12月26日(土)

眠い。以前利用したことのあるシンガポール航空。座席に座り、出発を待っている。スクリーンの両脇や窓にはクリスマスの飾り付けがしてある。機体はBOEING777 JUBILEE。全席禁煙。ハンドセットの取り扱いはもう慣れたものだ。いち早く自分用の液晶パネルに現在位置情報を表示して優越感に浸ったりしてみた。12:00、飛行機が動き出した。

今日は朝から洗濯ものが乾かなくて、寮を出るのが遅れた。空港で落ち着く時間がほとんどなく、必要な買物や手続きをあわただしく次々と済ませ、あっという間に機中の人となっている。しかし今日はよく行列に並んだ。さて、まずはシンガポール行きだ。これからガイドブックを読もうと思う。今回は全然、準備万端ではない。

眠い。とても眠い。でもなかなか眠らせてくれないな。渡されたおしぼりはとても熱かった。火傷するかと思ったぞ。すぐ冷めたけど。ランチのときは初めて赤ワインを注いでもらった。とてもうまい。前回同様、やはり浮かれ気分させられた。シンガポールは今、雨季だそう。飛行機の中では映画『スモール・ソルジャー』をやっていたが、見なかった。そして私の腕時計時刻 17:55 (現地時 16:55) シンガポールのチャンギ空港に到着した。乗り継ぎ時間が4時間以上ある人は、無料の市内観光があるんだそう。この前来た時、そんな案内アナウンスあったかな。そう言えば、今日はあの歯ブラシと靴下のセットが配られなかった。あれは夜の便だけなのか？

空港はこの前と特に何も変わっていない。ずっと飛行機で座りっきりだったので、空港内をひと通りうろうろと歩き回った。でもやっぱり何度みてもシンガポール航空のスクワデスってセクシーだ。機内では酒の種類も多くてどんどん進めてくれるから、シンガポール航空を「空飛ぶキャバレー」と言う旅行者もいる(らしい)。

次の便はSQ162。空港内のインフォメーション画面を見ると、Gate 7 のところに「New Gate」とある。これは Gate が新しいってことか？ それとも出発 Gate を変更したってこと？ 他と離れた端の方にあるから、多分新しいって意味だろう。

今回はチケット手配するのも遅かったけど、それ以外の準備も何もしていなかった。全部昨日から今日にかけてやった。年賀状も書いたし、洗濯もしたし、必要なものは空港で買ったし、あ、旅行保険入んの忘れた…。大丈夫かな。

この便は A310 で機体は小さい。液晶パネルはない。ロビーで人が少なかったから、座席数も少ないのだろう。窓から外を見ると、雨は降っていないが地面が濡れている。それから空調のせいかもしれないが、さっき着いてから全然暑さを感じない。外も暑くないのかな。いや、さっき到着のときに気温 28 度って言ってたからそんなことはないだろう。快

適なものいいけど、東南アジアへ来たんだからちょっとぐらい暑さを感じたい。定刻どおり 18:30 に飛行機はターミナルを離れた。えらく空席が多いな。国際線でこんなに空いてるのって初めてだ。半分ぐらいしか乗ってないんじゃないのか？

19:50、もう外は真っ暗だ。ぼつぼつと陸地の灯りが見える。なんか稲光が見えるぞ。

20:00 (現地時 19:00) インドネシアのスカルノ・ハッタ国際空港着。イミグレまで来てから気が付いたが、SQ の機内で入国カードくれなかったぞ。イミグレの兄ちゃんにもらって記入した。うーん、今回の SQ はなんかちょっと抜けてる。手続きが終了後、20,000 円を両替し (結構大金だったようだ) 外へ出た。来たぞ！早速、

「どこに行くんだ？ タクシーは？」

と言って兄ちゃんがついてくる。バスはどこだと聞くと、あれだと教えてくれたが、ガンビル駅へ行くかと聞くと

「ガンビル？ フィニッシュト。」

どうせ嘘だ。ダムリエアポートバスの横にいた運転手らしき人に聞いたら、ガンビルへ行くという答えが返ってきた。やっぱりな。さっきの兄ちゃんは

「OK。」

と言って行ってしまった。これにだまされる旅行者もいるんだろうなあ。フィフティ (50,000 ルピアの意) と言ってたから、かなりのポったくりだ。

街へ向かう車中、道沿いには MITSUBISHI から始まって SANYO、JVC、HITACHI、TOSHIBA、FUJIFILM … とひと通りの日本のエレクトロニクスカンパニーの電光看板。韓国の LG もあった。このバスは 5,000 ルピア均一のような。途中、何人が降りて行く。ガンビル駅に着くと、サテの屋台、さっそく声をかけてくるバジャイ¹のドライバーたち。この雰囲気はちょっとうれしい。まず切符売場へ行ってみると、窓口は全部閉まっていた。ジョグジャ行きはさっき 20:40 に出たばかりだった。その時 20:43。うわー、ちきしょー。朝 6:10 というのがあのようなので、明日の朝早くまた来ることにしよう。とりあえず今日はジャカルタで 1 泊だ。そのまま駅を出て、ジャクサ通りを目指して歩き始めた。夜だけどあまり怖くない。暗いから、向こうも私が日本人だというのがわからないのかもしれないが、別に襲われそうな雰囲気はない。物乞いもないし、結構きれいな町である。

ジャクサ通りはなかなか楽しいところだ。安宿や安食堂、バンド演奏をしているレストランなどもある。雰囲気を見ながら通りを端まで歩いて通り過ぎてから、また引き返した。そしてバンドが演奏している店 (オープンだから丸聞こえ) の隣の飯屋に入った。

兄ちゃんに、ライスとチキンのゴレンをくれと注文した。それと Tea と言ったら、コーラのピンみたいなのに入った甘い紅茶「Tehbotl」が出て来た。すだちが入ったフィンガーボールも出て来た。こんなの初めてだな。料理は飯だけの皿と、チキンのモモ肉を油で揚げた辛~いものに、化粧品の匂いがする葉っぱとレタスが添えられて出て来た。あまりうまいとは言えないが、シムリアップやベトナム鉄道で食べたことのあるまずいもの程はまずくない。はっきり「まずい」とは言えない。でもこの葉っぱは「うまい」とも言えないな。

¹ジャカルタの赤い三輪自動車タクシー。タイのトゥクトゥクと同じようなもの。

そしてこの辛さは頭が活性化される。なんか脳の活動が一段上のレベルに上がった感じになるぞ。目の前が開けたような感覚がする。ジャカルタ行き飛行機の中で食べたスパイシーな料理（米が前の便と違って細長かった。チリソースも付いてた）も頭が冴えた。この辛さって脳にいいんじゃないか？

さて、飯の後は宿探した。全然苦労せず、最初に入った宿、Bloen Steen Hostel であっさり決まった。旅行者が少ないのかな。ガイドブックにはこの宿は大人気でなかなか空いてないというようなことが書いてあったんだけど。兄ちゃんがとても感じのいい人で、部屋も悪くない。結構長居できそうな良い宿である。最後の日にまた泊まるならここにしよう。

明日は早起きしてジョグジャ行きのチケットを取りに行く。取れるかどうかはわからないが。ベッドに横になって思った。やっぱりアジアはいいねー。安宿街と屋台の雰囲気…。ここはジャカルタだ。この人たちはこの前、学生が中心になって大統領を辞めさせたんだよな。あの塔のあたりで集会してたんだよなー。現実に自分は今、その場所にいるんだよなー…。

23:00。おやすみ。

7.2.2 インドネシアらしさ 1998年12月27日(日)

朝5:00に起きて、薄暗い中、宿を出て駅へ向かった。意外に人通りが多い。5時だというのにみんなぞろぞろと独立記念塔へ歩いている。何かあるのか？5:30ごろ着くと、駅では既に窓口の前に行列ができていた。でも並んだら簡単にチケットが取れた。6:10はもういっぱいなので、次の6:20の2ndトレインになるそうだ。

6:00、売店で水を買って改札を入れて階段を登った。座席に着いてしばらくすると列車が動き出した。時計を見ると6:10だ。あれ？間違っただんじゃないか？周りの人にチケット見せながら乗ったからこれでいいのかと思ってただけど。その後、座席に来た2人の職員に何か言われた。インドネシア語でわからなかったのでチケットを見せると、特に問題はないようだ。本当に？この席の人がたまたまいなかったのかな。それとも早く出発したのか？わからんけど、

「No problem.」

と言ってくれたからいいんだろう。ジョグジャに行けなかったら困るけど、行けるなら何でもいいです。でもその後に来た車掌らしき人はチケットをちゃんと見ないでハサミを入れた。

朝だからだろうか。全然暑くない。7:30ごろ朝食。きれいなお姉さんが2人、座席まで注文を取りに来た。NASI RAWANを頼む。NASIはご飯、RAWANは何だろう。何か聞かれたがわからなかった。牛と魚のどっちにするかとか聞いてるのかな。それとも味付けに関する事か？通じないもんだから、お姉さん同士で笑顔で顔を見合わせてる。何かわからんけど適当に決めてくれたらいい。しばらくすると、パサパサご飯にもやしが入った皿と、牛肉と半分のゆで卵が入ったスープの皿が出て来た。うまい。昨日の夕飯より数段上だ。

飯を食べた後、強い日差しが照ってきた。そう、これだ！これがないと赤道直下の国

に来たという実感が湧かないぜ。いいぞー。窓から見える景色は田んぼ。ベトナムの鉄道の窓から見たのと似ている。この国のあらゆる風景は、これまでに見たことのあるものばかりだ。新鮮さがない。珍しく感じない。旅を続けているとだんだん無感動になると言うが、私も目を輝かせて小さなことに感動していた頃とは変わった気がする。初めて来た国なのに、昨日インドネシアに来てから、勝手にわからず困ったということがない。旅行技術（「技術」と言うほどのものではないが）は、アジアならどこでも似たようなものなのだろう。それだけ誰でも旅がしやすいということだ。とても良いことだと思う。

しかし無感動というのは旅において最も意味がなく、つまらなく、致命的で嫌われるべきことだ。さらに、危険を察知する能力も低下する。幸いトラブルに巻き込まれてはいないが、それで旅に危険がないと思ってしまうてはいけない。列車に揺られながらそんなことを考えていたら、だんだんと自分が旅に求めているものが何なのかわかってきた気がする。

今までに経験したことがないことを経験したり、見たことがないものを見たり、どうしたらいいのかわからない状況をなんとかして切り抜けたりすること。エキサイティングというのはそのところにある。知らない、わからない、その時どうするのか。自分はどう出るのか。もしかしたら、別に外国である必要はないのかもしれない。ただ、日本人がまわりにはいない環境は、より純粹に「自分」がどうするのかという状況を作り出してくれる。見たことのないもの、見たことのない自分が現れる。それがとても面白いことなのだ。しばらくするとその環境に慣れてしまう。だから次の新しい体験を求めて、行ったことのない国へ出かけるのだろう。私が求めているのはその「想像がつかない新しいもの」なのではないだろうか。

新しい土地というのはエキサイティングであると同時に多少の不安もある。だがそこには必ず人が暮らしているのだ。人がいる。それだけで多分、なんとかなる、大丈夫と思えるのだろう。当然どこにでも悪い人もいれば良い人もいるのだ。悪い人に会い、トラブルになることもあるだろうが、今までの経験からすると、それで訪れたその国を嫌いになることはないと思う。

今 8:02。まだインドネシアらしさは見えてこない。インドネシアは何がインドネシアなのだろう。旅行はしやすいけど、まだ特徴が見えないのだ。ずーっとそうなのだが、目に入ってくるもの全てが、今までにどこかで見たことのあるようなものばかりだ。一瞬、

《ここ、どこだっけ？》

と思うことが何度もある。

《インドネシア。インドネシアだ。》

と自分で自分に言い聞かせないと、インドネシアにいることを忘れてしまいそうだ。

8:18。白シャツに肩章が付いていて、ネームプレートも付いてるキチっとした制服を着たお姉さんが来た。またもや何を言われたのかわからない。この鉄道では英語は通じないらしい。チケットかな？と思って差し出したら、食べる仕草をされた。ああ、さっき食べた飯代か。いつ払えばいいんだろうとは思ってたけど、そんなキチっとした人が集金に来ないでよ。さっきのお姉さん2人組が集めればいいのに。

列車が止まると、いろんなものを売りに売子が通路を通り過ぎる。

「ナカー、ナカー。」

とか

「ナシー、ナシ、ナシー。」(ご飯のこと。これだけは分かる。)

とか言って通り過ぎる。こちらが声をかけなければ、立ち止まって押し売りしてくることもない。売子の声を聞いているのはなかなか楽しい。他には、

「ダンラマーユー。」

とか

「メディア、メディアー。」(新聞『MEDIA INDONESIA』のこと。)

「レペー、ケサン、レペー。」

などがある。ほとんどは意味がわからないが、いくつかは彼らが手に持っているものでわかる。でもこの人たち、列車が動き出してもそのままだけど、どうするんだろう。どっかで降りて逆向きの列車に乗り換えるのかな。

さっき止まったところで、窓の外で手を差し出してくる子供がいた。列車の窓の位置が高いので、外から壁をドンドン叩いてから、ちょっと後ろに下がってこっちを見て手を出すのを繰り返す。でも元気そうだし、身なりも普通だ。列車の中にも手を差し出してくる子供が何人か現れるようになってきた。床を掃いて袋を差し出してきた兄ちゃんにはRp500(500ルピア)あげたけど、ただ手を出してくる子にはやらん。持っていた中で一番小さいお金がRp500だったので出したのだが、多すぎたかな。

物乞いも、インドほどの衝撃的なものはない。払わないことに対する罪悪感のようなものも湧かない。もしかしたら、これこそ無感動の最たるものかもしれない。インドでは払わないのに必死な覚悟が必要だった。見た目の衝撃とともに、あまりにもその数が多いからだ。払うにしても全てに払っていたら金はすぐに無くなってしまう。自分なりの基準が必要だったのだ。持っている者が持たない者に分け与える。その考えは自然なのかもしれない。でも、そう簡単にできることでもないと思う。今、何も迷うことなく、手を出して来る人に何もあげない自分がある。そう、迷うことすらなくなっているのだ。これでいいのだろうか。いくらか傲慢ごうまんになった気がする。

9:30ごろ止まった大きな駅から、若い女性が隣りに座った。3人ぐらいで乗ってきたのだが、

「ここ、いいですか？」

ということ(多分)聞かれた。これって指定席じゃないのか？ さっきまでは別の男の人が座ってたよな。彼女は、私のような日本人の男が座ってる隣りでも何の抵抗もないみたいだ。こっちはちょっと嬉しいけど。でも彼女の左手薬指に指輪あり。一緒に乗ったらしい男の人が何度か話しに来ている。旦那かな。それにしても年の差がありそうだ。

11:00ごろ、景色は田んぼから山に変わっていた。まだ田んぼもあるが、山際の段々だ。段々畑じゃなくて段々田んぼ。11:18、LEGOKという駅で止まったら、何やらギターを弾きながら歌う人が乗って来て、演奏しながら通り過ぎて行った。面白いけど、ごめん、コイン持ってないんで払えないんだ。今持ってる中で一番小さい紙幣はRp1,000だし、お釣りがくれとも言えないしな。

| | | | | | | | | | | | | | | {

14:30 ごろジョグジャに着いた。列車を降りると、人がとても多い。早速、タクシーやベチャ²が声をかけてくる。商店が並んでいて、とても賑やかで楽しい町だ。日用品や民芸品や二セキャラクター商品がたくさん売られている。マリオボ口通りの店を眺めながらずっと歩いたが、途中横道に入ったりしていたら、どこを歩いているのかわからなくなってしまった。ベチャがしつこく付いてくる。無視無視。ある通りで座って地図を眺めていると、1人の男の子がやってきて私の横に座った。

しきりに Art Shop に誘われたが行く気はしなかった。結構しつこいな、休ませてよ。頑として動かなかつたら、彼はあきらめたようだ。後で必ず来てくれと言っていたが、なぜか店と逆方向に去って行った。自分がどこにいるのか教えてもらってわかったので、彼の姿が見えなくなってからソスロへ戻ることにした。途中、日本人っぽい顔立ちの美女(でも日本人じゃないらしい)が友だちを見送っているところに会い、目が合った。別に声をかけた訳じゃないけど、小さな喜び。

宿は、ベチャの兄ちゃんに誘われるままに通りを入れて行って見つけた PRASTHA JAYA (偶然にも目指していた宿だった) に決めた。部屋にはベッドが2つある。トイレ、マンディールーム共同。これで Rp8,000。安い! 上(3階)に日本人女性が4人泊まってるらしい。他の部屋はほとんど空いていてとても静かだ。聞くと、やはり今年は旅行者が少ないそうだ。

ご主人の息子らしき兄ちゃんと、近所の知り合いらしき兄ちゃん(名前はドラエモンと言ってたが本当かどうかあやしい)の2人がいろいろと教えてくれた。この町の見どころやポロブドゥール、プランバナ、ディエン高原、プロモ山などなど。さっそく近くの旅行会社のオフィス(オフィスと呼ぶには大げさな小屋)で明日のポロブドゥールとプランバナへのツアーを申し込んだ。バリ行きのバスの手配も済んで、後は楽チンだ。バリからジャカルタへ戻るには飛行機にしようと思うが、向こうで取れるだろうか。

その後、バティックの店へ行った。なかなかいいじゃないですか。切って服を作ったりするやつじゃなくて、額に入れて飾ったりするアートバティック。初め買う気はなかったのだが、見ているうちに欲しくなってしまった。大1枚と小さいのを2枚買った。やはり Teacher の作品はいいし、高い。と言うより、Student のものが安いのだ。相場が全然わからんが、宿の兄ちゃんは信用できる。とても親切だし、明るくていい奴だ。歩いている最中、何度か雨が降ったが、いつもすぐ止んだ。

17:00 ごろ宿の近くで夕飯を食った。エビのスープ&ライス、ガドガド、アイスティー。どれもとてもうまかった。インドネシアで食った中で一番だ。「おいしい」はインドネシア後で「Ena!」というそうだ。さっそく店の人に、

「Ena!」

と言ってみた。宿の彼は 18:00 にラマダンあけだそうで、18:00 になるとともに水を飲んでいて、今朝から何も飲み食いしてないそうだ。目の前でバクバク食って悪かったかな。

レストランを出た後、ラーマヤナ舞踊のチケットを取りに、またさっきのオフィス

²輪タク。ベトナムのシクロと同じで、三輪自転車の前に座席があって、ドライバーは後部でペダルをこぐ。

へ行った。その後 19:30 まで宿で待機。日本人旅行者の賑やかな声と、モスクからのコーランの放送が聞こえる。別にうるさいとは思わない。しかしこの宿、本当にこの設備で Rp8,000 って安いよな。

19:30、迎えが来た。外は激しい雨だ。夕方のと違ってなかなか止まない。ラーマーヤナ舞踊は以前、福岡のアジア太平洋フェスティバルで見たものとは比べものにならない素晴らしさだ。衣装は「本物」感を漂わせている。とても美しいし、格好いい。演劇仕立ての舞踊で、見ていて全く飽きない。ラーマーヤナの物語は知っているつもりだったが、誰だかわからない登場人物もいた。とても迫力があって、楽しかった。これって、旅行会社を通さずに自分でチケット買ったらもっと安いのかな。ガイドブックを見ると 1 桁値段が違うぞ。でも別にだまされた訳じゃなくて、旅行会社で買うとこうゆう値段らしい。

宿に帰ってから洗濯をした。どうやら寮の鍵をジャカルタの宿に置いてきてしまったらしい。ポケットに入っていなかったので全荷物を探したが、見つからなかった。日本に帰ってから部屋に入れないな。まあなんとかなるでしょ。

明日は 5 時出発だ。ついにポロブドゥールが見られる。現在 21:41。寝る。

7.3 歴史の町ジョグジャカルタ

7.3.1 ポロブドゥール 1998 年 12 月 28 日 (月)

朝 4:30 起き！結構起きられるもんだ。4:45、暗い中を迎えに来た兄ちゃんとオフィスの小屋へ行った。5:00 ちょい過ぎに 8 人乗りバスが来た。バスには先に 2 人乗っており、私が乗って出発した後にさらに 2 人を乗せてポロブドゥールへと向かった。とても眠かったので、バスの中では思いっきり眠った。

6:00 ごろポロブドゥールに到着し、バスを降りた。遠くにちらっとストウーパが見える。チケットを買い、中へ入った。ここはがっちり柵があって、入口でチケットをもぎる人がいる。しかし中へ入るとしつこくついてくる T シャツ売りのおじさんやパンフレット売り、ネックレス売りなどがいる。どうやって入ってくるんだ？いくら払ってんのかな。

中へ入って思った。これは完全に「観光地」だ。ポロブドゥール自体は確かに素晴らしい。しかしアンコールのように、現地の人々が自由に出入りできて（アンコールは囲われていない）子供たちが走り回っているようなあの雰囲気はない。「出口はこちら」とかいう看板もあるし、何かもの足りない感じがしてしょうがない。人々の生活の場でも、坊さんの祈りの場でもないらしい。

見るのは下の段から順に、全てをぐるっと 1 周して見ながら上へ登っていった。ここのレリーフの彫りは深く、表情も豊かだ。レリーフの表現としてはアンコールよりも立体感、躍動感が素晴らしい。まわりの山々の景色も、朝早いせいもあって雲や霧のかかり方がとても幻想的だ。ストウーパの並ぶところに出ると、それまでの段とガラッと雰囲気が変わった。とても静かで落ち着くところだ。「静寂」というのは音がないだけではないことを感じさせてくれる。

そこには座禅している観光客の親子がいた。座り込んで瞑想したくなる気持もわかるな。

落ち着いた雰囲気と、周りの景色がとても素晴らしい。時間がたつにつれて日が照り、青空がのぞくようになってくると、ボロブドゥールは鮮やかさを身にまとう。雨上がりで石が濡れていたせいもあるが、うす暗かった表面がはっきりとしてくる。闇から光へという移り変わりを見せてくれる。

日光とともに観光客の姿も増えて、賑やかになってきた。日本人もちらほら見える。8時ちょっと前、何かが足りないという気分のままボロブドゥールを下りた。ツアーに含まれる朝食（パタートーストとTEAとフルーツサラダ）を入口近くのレストランでとり、8:10ごろ次の目的地、プランバナンへ向かった。

バスは、オランダから来た夫婦を途中で降ろした。彼らはプランバナンへは行かないらしい。それ以前にプランバナンを知らなかったようだ。一応ガイドブックのページをめくって、ふーんと言っていたが、それほど興味はないようだった。彼らはボロブドゥールだけのツアーだそうだ。

どうも話すきっかけを失ってしまった。一緒に乗っている他の客の話に入り込めない。彼らからすれば、私はずっと黙っている変な日本人に感じられただろう。付き合いづらい奴に見えたに違いない。

10:19、プランバナンへ到着。ここはさっきのボロブドゥールとちがって、ヒンドゥーの寺院だ。やはりヒンドゥーの遺跡は面白い。結構楽しめた。時間のせいかもしれないが、観光客はボロブドゥールより多くて、にぎやかだ。神殿は

ブラフマー シヴァ ヴィシュヌ
ハンサ ナンディン ガルーダ

というふうには並んでいた。人が多いので、神殿の石段を上がる時に下りて来る人とすれ違う。中へ入るには前の人が出て来るのを待たなければ入れない。三神とナンディンは中に像があった。持っているものなどでどの神かわかる。こういうのはやはり、訳がわからず漠然と見るよりも、ある程度知識があると楽しめる。そして見上げるほどの高さがある遺跡というのはやはりいい。思わず「おおー」と声をもらしてしまふ。各神殿をじっくりと見てまわった。ひとつわからなかったのは、シヴァ神殿の彫刻にハヌマーンや猿軍の姿が彫られていたことだ。ハヌマーンってヴィシュヌの家来じゃなかったっけ。それとも猿=ハヌマーンの猿軍という訳ではないのかな。

それからここで、ツアーのいやなところを感じてしまった。12:00に戻るように言われて単独行動に出たのだが、途中で雨が降って雨宿りしたりしたせいもあって、セウ、ブッラ、ランブン寺院を見ることができなかったのだ。なんてことだ。時間を気にせず、自分のペースで旅をしたい。こっちは道は何があるんだろう、この像は確か…とか考えたりしながら歩きたい。さて、そろそろ行くか、と自分のタイミングで立ち上がりたい。雨宿りをしながらおじさんやその仲間たちと話したりした時間。こういう何でもないのんびりした時間が貴重なのだ。ツアーだと待っている人がいるので、どうしてもわがままは許されない。時間どおりに戻らなければならぬ。目的地までの移動は楽だが、他の点ではツアーで来たのは失敗だった。本当なら、時間がいくらでもあって、もしバスがなくなっても今晚はこの近くの宿に泊まればいいや、というそんな気持ちで旅をしたいものだ。

待ち合わせ場所は

「やれやれ、やっと帰ってきたよ。」

と言わんばかりの雰囲気だった。プランバナンを出てから近くのレストランで食事をし、ジョグジャへ帰ってきた。

帰りの車の中で考えていたことは、《この旅には何かが足りない》ということだった。旅に大切な何かを無くしてしまったのではないかと思った。待ち合わせ時間にちょっと遅れてしまって、萎縮している自分がいた。他のツアー客に融け込めない自分がいた。ポロブドゥールもプランバナンも遺跡自体は素晴らしいのだが、心の底から湧き上がる全身にみなぎる感動、この遺跡、この土地に出会えたことへの感謝と喜びのようなものが湧いて来ない。強烈さ、衝撃がない。インドネシアはとても旅をしやすい。だが、今日まであまり写真も撮っていないのは、2つの寺院以外で撮りたくなるようなものに出会っていないからだと思う。2つの寺院の写真を撮ったのは、観光地へ行ったときの癖みたいなものだ。

心の中が満たされない。何かが足りないのだ。小さなことのひとつひとつに感動していたあの自分はどこへ行ったのだろうか。私がアジアを好きなのは、自分にとって新しいことだらけの場所だと思っていたからではないだろうか。もしかしたら、初めて行くのがヨーロッパの国々だったとしても感動できたのかもしれない。ヨーロッパ文化を見まわっても新しい感動はないと思いついでいるだけなのかも知れない。全てが新鮮であったアジアの旅はもう終りにさしかかっているのだろうか。インド、タイ以外の東南アジアの国では、必ずその2国の文化が入ってきていて、似通ったところがある。それがだんだん物足りなくなっているのかもしれない。この旅行中よく

「Enjoy?」

とか

「Interesting?」

と聞かれるのは、私がよほどつまらなそうな顔をしているのだろう。つまらない、と言い切ることはできないが、少なくともこの旅は自分にとって「最高」でないことは確かだ。長く旅をしている人は、おそらく一度はこんな感じになるのかもしれない。いや、私のように無感動になる時期は必ず来るはずだと思う。

外国に限らず、どんな人と会おうか、どんな場所に出くわすかは運命みたいなものだ。あらかじめその国の知識を持っていてあれこれと予想してみても、旅は人や土地との偶然の出会いに左右される部分が多い。個人で自由に旅をしている人は特にそうだろう。そして旅行者にとって、そこで会おう人はその国の代表者なのである。旅をした国の印象はその人々によって決まる。日本へ帰って、旅した国で大きな事件が起こったというニュースを聞くと、出会った人々の顔が浮かんで心配になる。そういう国は、自分にとって「近い」国であると言える。

しかしそういうことを考えてみても、滞在3日目のこの国インドネシアは、自分にとってはまだ遠い国のような気がする。なぜだろう。宿やツアーリストオフィスの人々は皆いい人たちだ。何日でもいられるほど居心地も良い。遺跡もそれ自体は良かった。でも、

「インドネシア最高！」

と言い切れる自分はいない。

17:00 ごろ、夕飯を食いに出了。マリオボ口通りへ出ようと思って歩いたのだが、途中で昨日宿で一度会ったドラエモンに会った。

「どこ行くんだ？」

と聞かれたので

「飯食いたいんだけど、どっかいいいところないかな。」

と言うとすぐ近くの店へ連れて行ってくれた。歩きながら、Girlはどうだ、ベリービューティフルだ、日本人ならFreeだとか言われた。お前もそういう奴か…。こいつがこんなこと言うのは、そういうことをしている日本人がいるということだ。そう言えば、タイに行ったと言ったら

「タイにはきれいな女がたくさんいるだろう。どうだった？」

とか言ってたしなあ。おいおい、日本人がタイに行くときそういう風に思われんのか？

レストランはとても広くてきれいだった。庶民の店と、ドアのある高級レストランの中間というところだろうか。ちょっと値段は高めだ。ナシ・チャンプルとガドガドと、気になってたHari bai beerを頼んだ。この前のタヒチに続いて、このビールもまたモンドセレクションの金メダルマークが入っている。しかも3つも。でもビールまでも感動をくれなかった。これが金賞なのか？やはりビールはその時の気分に左右される飲物のようだ。

料理はうまかった。でも注文したものがとても似たものだった。ガドガドにはご飯がついて出て来たので、変な注文のしかたをしてしまったと思った。昨日の店ではガドガドにご飯は入ってなかったから、サラダの感覚で頼んだんだけど。これだと日本で言うならば、そばとうどんを一緒に注文したようなものじゃないか。でもどちらもうまかった。ただ、ガドガドは昨日の店の方が好きだな。

レストラン(「飯屋」というよりこう呼んだ方がここの雰囲気合ってる)にはインターネットにつながっているパソコンがあった。インターネットカフェは知ってるけど、インターネットレストラン？パソコンは2台あったが、誰も使っていなかった。

レストランを出てからは、その裏通りを奥まで通り抜けた。インドのバラナシの裏通りをきれいにした感じで、小さな店がいろいろあって楽しかった。宿の脇の通りも先まで通り抜けてみた。屋台やらバティック屋やらが並んでいて、ここもなかなか楽しい。30分ぐらいうろろしてから宿に戻った。

19:30まで部屋でごろ寝した後、今夜はワヤンを見るために出かけた。宿の彼が気づいて声をかけてくれた。

「トモ！」

彼は私の名前をちゃんと覚えていた。彼にベチャのところまで連れて行ってもらった。すでに話がついていたのだろう。すぐに何も言わずに乗り込んで出発できた。明日のことも伝えてくれているらしく、明日もこの彼のベチャが足になってくれるそうだ。料金もはつきりしてるし安心だ。

ただ、ベチャはベトナムのシクロと全く同じ形をしているので、乗っているとベトナムでのあのいやな出来事を思い出してしまう。でもここでは不安はない。土地の初めての宿との出会い方で、そこでその後の旅行スタイルや予定は大かた決まると言える。今回は楽だ。

20:00 から 22:00 まで、ラーマヤナの影絵を觀賞した。でもはっきり言ってつまらない。退屈だった。思ったよりも動きが少なく、登場した中でどれが誰なのかさえわからない(どれがラーマだ?)。ストーリーもどの辺をやっているのかさっぱり見えてこない。ずらーっと並んでいて期待させる人形は半分も使わない。昨日の舞踊の方が格段に面白いな。今日のは眠くて仕方なかった。夕飯時にビールを飲んだせいもあるが、ガムランのベースになってるあの繰り返しのリズムも眠気を誘う。多分ほとんど見ずに眠ってしまっていたと思う。これはあまりお薦めできないなあ。

明日は王宮と町を見てまわろう。夜寝る前、日本へのポストカードを6枚書いた。両親と亮と生沼へ。それから年賀状も兼ねて川辺さん³、佐野さん、新川さんへ。なんか、旅行する度に、旅行中に便りを出す人が増えてるな。初めのころは2、3通だったのに。他にも出したい人はいるけど、バリで出すことにしよう。

7.3.2 Kusdiantoro 1998年12月29日(火)

今日は遅く起きた。9:30 ごろ、この辺を観光しに昨日のベチャで出かけた。はじめにバティックファクトリー SENO へ。バティックを制作している作業を真近で見ることができる場所だ。面白かったが、ただバティックはおととい買った物の方が色やデザイン的に優れている気がした。しかしこの店でも買ってしまったんだな、これが。適正価格がどれぐらいなのかは全然わからない。私が US\$ とルピアを混ぜて払ったうち、いくらかが店員の懐に入った。相手をした店員はしきりにルピアを持ってないか聞いていたが、それは自分がいくらか取るためだったのだろう。

その後、パペット工房に行った。木のあやつり人形や、皮で作られた影絵用の人形などがたくさん並んでいた。そこの兄ちゃんはとてもいい感じの人で、しつこく商売を持ちかけてこない。

「お土産？」

と2回聞かれただけだ。全然買わなくてもいいやな顔ひとつせずに、作業や完成品の人形を自由に見せてくれた。こうでなくっちゃ。

それからちらっと別の店に寄った後、王宮へ。まあ、どこの宮殿でもそうだが、昔の絵画や服、食器などが展示してあった。入口ではチケットを買って入るようなところなのに、なぜか南の方の門へ行くと現地の人々が自由に出入りできるようになっていた。そしてそこで、アジアの旅ではおなじみの「勝手にガイド」に会ってしまった。

Holland のオレンジのサッカーシャツを来ている「奴」は、親切にプリンスキャスル(?)へ連れて行ってくれた。私は最初、王宮の敷地内だと思っていたので怪しまずにそのまま付いて行った。だが観光客が誰もいない。その辺りで、これは「勝手にガイド」だなと気づいた。その後、さんざんバティックサロンへ誘われた。いい、と言ってもしばらくするとまた別の店へ誘う。しつこいので、私は建物だけ見たいんだと言って、無視して歩き出した。だんだん気分が悪くなってきた。

³会社の上司。私が所属している研究室の室長である。私の旅行に理解を示してくれるので、旅行のための休みは取りやすい。ただし、仕事に対する要求は厳しい。

ベチャドライバーが王宮入口で待っているの、無視して王宮へ戻ろうとすると、奴は10,000ルピアくれと言う。これが奴のJOBだと言っている。そう来た。誰がそんなに払うもんか。いやだと言うと、俺にはbrotherがいて、もし払わないとあなたはどうかこうたら…。はいはい…。一応、穴場らしいプリンス用の建物には連れて行ってもらったので5,000ルピア札を出してみたが、\奴"は10,000と言って譲らない。なら払わんと5,000は引っ込めて、王宮へ入った。

その王宮の南の出口で座って見ていた男の人が、払わなくてもOK、我々はフレンドだと言った。私はその男の人に

「こいつは10,000払えって言ってるんだよ。」

と言ったら、その人は「それはいかん」という風に首を振った。Hollandシャツの\奴"はこっちを怒った目で見えていたが、私は無視してそこを離れた。一気にいやな気分になってしまった。王宮なのに、なんでこんな奴がいるんだよ。あのゲート、閉じとくか見張りを付けとけ！とても腹が立った。

その後入口へ戻り、待っていたベチャで水の宮殿へ。水の宮殿の入口では、ベチャの彼が引き下がってしまうガイドの男がいた。ガイドの方が立場が強いのかな。ガイドは私の乗ったベチャを止め、ベチャの彼にお前はこれ以上来るなというようなことを言って、降りた私に付いて来た。なんか態度が高圧的だ。チケットを買って入った後も付いて来ようとするので、ガイドはいらんとと言うと、彼はオフィシャルだと言う。でも金取るんでしょと聞いたら、オフィシャルだから取ると言う。なんか感じ悪いな。オフィシャルとかオフィシャルじゃないとか関係ない、入場料以外には払わんよ、と言ったら去ってくれた。

中へ入ると、後ろから声をかけてくる奴がいる。またかよ、ガイドはいらんとって言ったのにもって無視していたら、横に来たのはベチャの彼だった。なんだ、ほっとした。それから彼が中を案内してくれた。私がガイドを断ったのを見てから来たらしい。金を取るオフィシャルのガイドを差し置いて観光客を案内してはいけないのかな。

中では子供たちが遊んでいたり、パティック屋の店先で口で布に線を描いている女の人がいたりして、とても和やかな雰囲気だ。ほほえましくて良かった。しかしジョグジャはどこへ行ってもパティック屋ばかりだな。ベチャの彼が、スルタンのピクチャーがかかっている店があるから見に行こうというので、案内してもらった。スルタンの顔を見せてもらったついでにその店のパティックを見ると、今日、王宮に行く前にSENOで買ったのより買いたくなる色のパティックがあった。でも金がないからもう買わない。うーん、惜しいなあ。なんでさっき買っちゃったんだろう。店のおやじはいい人だった。

水の宮殿を出てからはソスロへ戻った。ベチャの彼には最後にレストランに連れて行ってもらい、その前で今日の料金を払って別れた。ベチャの料金は最初の約束どおりだ。いい人だー。レストランではNASI CAMPUR^{ナシチャンプウル}（インドネシア料理ではこれが最高！）を頼んだが、昨日の店の方がうまかった。

宿へ帰り紅茶を飲んでのんびりしていると、宿の彼が来たのでいろいろ話をした。何を見て、何が面白かったかを話しているうちに、シルクのパティックを見たことないのかと聞かれた。ないなら歩いて15分ぐらいのところにあるから後で見に行こうという。シルクの作品を作るアーティストは5人しかいないそうだ。ここで見逃すと、他では見られな

いらしい。ん？でもSENOでシルクのやつなかったかな。その後、宿の屋上へ上がって、彼にインドネシア語をいろいろと教えてもらったりした。彼は日本語の教科書を持っていて、いくつかの日本語の単語も知っていた。

彼はこの辺のガバメントのアマチュアチームのサッカープレーヤーだったそうだ。ここでの「ガバメント」というのが日本語でどういう意味なのか良くわからなかったが、オリンピックに出るようなナショナルチームということではないらしい。州とか市のレベルの公式チームってことかな。そう言えば、彼と並んで歩いているとみんな彼に声をかけてきた。みんな彼を知っていて、町の人気者らしい。彼はいかにもスポーツマンという風貌だ。足も速そう。

15:30ごろ、モスリムの彼はシャワー&お祈りへ。その後、2人でパティックの店へ出かけた。歩きながら彼と、寒い日本の冬などの季節の話をした。インドネシアが寒かったら、死んでしまうと言っていた。夏はインドネシアみたいに暑い、冬はスキーもできるという日本の気候は面白いらしい。それから、インドネシアに来てから、道にやたらと牛のマークの赤い旗が出てると、黒と赤に塗られたヤグラがあったりするのをよく見かけるので「あの旗は何？」

と彼に聞いてみた。あれは選挙のキャンペーンで、最も支持されているスカルノの娘メガワティの政党のものだそうだ。最も有力な政党で、彼らがおそらく勝つだろうというようなことを少し小声で教えてくれた。彼の様子から、この話題はあまり表で大っぴらに話すことではないということが感じられた。

また、スポーツの話などもしたが、私はサッカーをやらないのでその話題ではちょっと盛り上がれなかった。広場では子供たちがサッカーをしていた。サッカーってどこでも人気あるんだなあ。

店に着くと、かわいい女性がいた。握手して名前を聞いたが忘れた。どうも私は人の名前を聞いてすぐ忘れる。覚える気がないのかもしれない。それに、覚えにくいというものもある。多分、名前が漢字じゃないから字づらでイメージして覚えることができないんだろう。漢字文化の人間の記憶のしくみだねえ。

シルクに描かれたラーマーヤナは素晴らしかった。全体に青い色で描かれていて、その青がとて美しい色だ。今まで見たものと絵の雰囲気が違う。これまでにたくさん買ってしまっただが、全部いらぬ。この店のこれだけでいいと思うほどだった。特に今日行ったファクトリーで買ったやつはもういらぬ。彼女は作り方や、シルクでも洗って大丈夫なことを教えてくれた。「洗う・洗濯」という日本語も知っていた。

「そう、センタク！」

と私が言うと笑った。わー、かわいー。彼女はラーマーヤナの説明もしてくれた。宿の彼はモスリムなのでラーマーヤナは詳しくないから、ラーマーヤナの話は彼女に聞いてと言われた。ここでは宗教の違いが歴史の中に溶け込んでいる。宗教の違いを超えてみんな仲良く暮らしているというのが感じられた。そういう日常があるというのが、なんだか嬉しい。イスラム教、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教、世界の代表的な宗教が集まっているが普通に仲良くできている。よくニュースで聞く宗教間の対立はここではないのだろうか。なんだ、仲良くできるんじゃない、という感じだ。モスリムの人とヒンドゥーのお

みやげを勧めるというのも面白い。

それから何枚かを吟味して2枚選んだ。やっぱり伝統的なワヤンのデザインがいいね。抽象的なのはあんまり好きじゃない。大きいやつはとていいんだけど、持って帰ってから困りそうなのでやめといた。値段表を見せてもらってびっくり。安い！シルクだろ、何でだ？ ははーん、そうか、今まで他の店で買ったのはボられたということか。ちくしょう。

2枚買ったので、綿の小さい作品（Student's Work）の中からおまけを1枚選んでいいと言われた。おまけの一品は、ボロブドゥールの描かれたほのぼのとした絵柄のものをもらうことにした。

店の壁には日本人が作ったという非売品の一枚が飾ってあった。日本の伝統的な遊び、縄飛びやかくれんぼなどが描かれていて面白かった。うーん、もうちょっと彼女と話をしたかったぞ。店を出るとき、オーストラリア人がやたらと（8枚も）バティックを買っていた。

帰り道、彼は私と同じ27才（彼は8月生まれ）だということがわかった。彼は私を年下だと思っていたらしい。旅行会社で働いていたのだが、今はJOBがないそうだ。給料の話もした。紙だけが送られてきて、お金は得られなかったとか。いくら今日本の経済状態が悪いとか日本の物価は恐ろしく高いと言っても、私はちゃんと会社に雇われていて、給料を貰っている。旅行もできる。彼の前では、日本は今経済状態が悪いんだなどとしてくは言えなかった。

それにしても旅行会社で働いていたのか。ははあ、どうりで旅行者が必要な情報に詳しい訳だ。手続きもいろいろ手伝ってくれるし。1999年になって国の経済がよくなればJOBを得られると言っていた。そして結婚の予定があるそうだ。子供は2人欲しいと言っていた。私は彼女がいないと言うと、どうしてだと聞かれた。どうしてって言われてもなあ。彼女がいないってのは不自然に思われるらしい。

宿に帰ってからはまた屋上に上がり、彼と話した。日本の話。今私が住んでいる福岡。彼はFUKUOKAというのは初めて聞けらしい。やはり外国ではあまり有名じゃないんだらうな。

「小さい町？」

「いや、日本の西のKyushuエリアでは一番大きい都市なんだ。」

Kyushuというの知らないようだ。うーん、それ以上には説明できん。

「東京からは飛行機で1、2時間ぐらいのところにあるんだ。鉄道だと5時間ぐらいかな。」

私が東京へは今、鉄道より飛行機の方が安くて変だという話をすると、彼はいかにも不思議そうに、

「日本の鉄道は遅くて振動がすごくてサービスが悪いのか？」

と言った。いやいや、世界でもトップレベルの速度と快適さを誇る鉄道なんだけど。やっぱり飛行機の方が安いってのは変だと思うだらうな。私も変だと思う。

「最近、航空会社がチケットを安くしようと努力したんだよ。」

と答えたが、何か説得力がないよな。

それから腕の傷を見せながら、怪我をした話、入院した話などを聞いた。サッカーボールのマークのついた彼の名刺をもらった。彼はKusdiantoro。よかった、名前なんだっけ

と今さら聞けなかったから。私も彼に自分の名刺をあげた。私が雇われてるのは社員4,000人ぐらいの会社だと言うとちょっと驚いていた。日本ではそんなに大きい方じゃないんだけど。

話の中で、私はデンパサールから日本に帰るのかということを知られた。

「いや、日本への便はジャカルタ発だから、デンパサールからジャカルタまで飛行機で飛ばないといけないんだ。」

「チケットは持ってんの？」

「バリで買おうと思ってるんだけど。」

「なんだ、もっと早く言えば今日、ガルーダのオフィスへ行って買えたのに。」

その時、もう17:00を過ぎていた。

彼の知り合いの旅行社がまだ開いていて、そこでチケットが取れるから行ってみようと言う。彼と一緒に外へ出た。いつもの小屋とは違う旅行社では楽しい兄ちゃんがいた。とても熱心にあちこちに電話してくれたが結局チケットは取れなかった。1日も2日も3日もだめ。全てFULLだ。やはりクリスマスと正月はジャワからバリにみんなバカンスに行っていて、ちょうど私が席を確保したい1月3日ごろに帰ってくるらしい。仕方ない、バスか…。バリからだジョグジャ乗り継ぎでジャカルタまで2日かかる。バリでは1泊しかできないことになってしまった。

宿の屋上へ戻ってから彼と今後の時間と予定の整理をした。バスのチケットはここで両方取ることができるのか聞いてみた。ここからジャカルタまでのは取れるが、デンパサールからジョグジャまではどうかわからないという。それなら聞きに行こうということになり、再び外へ。忙しいな。

今度はまた別のところに連れて行かれた。そこで、デンパサールからジョグジャまでのバスのチケットはここでは取れないから、クタで泊まるホテルで頼めばよいということになった。ここ(ジョグジャ)からジャカルタへのチケットはいつもの小屋のオフィスで取った。しかし、ここって来る度に接客する人が違うな。小さいのにスタッフは何人いるんだろう。

部屋へ戻った。しばらく部屋で寝転んでいると、廊下から

「トモ！」

と呼ばれた。彼が、バリからのチケットが買えるから一緒に来いと言う。あの後もいろいろ当たってくれていたのだ。なんていい人なんだろう。並のサービスの良さではない。彼は真のエージェントだと思う。しかもこれは彼の仕事ではなく、極めて個人的な親切心からやってくれているのだ。「勝手にガイド」に彼の爪の垢を煎じて飲ませたいぐらいだ。

行ったのはまた別のところだった。そこでバスのチケットを買った。いやー、よかったよかった。今後どうすれば良いか、彼は細かく丁寧に教えてくれた。どこでどう乗ればよいか、何に気をつけるべきかなど。もうただ感謝感激である。

彼が町の人気者だというのは、一緒にいて良くわかる。こうやって私のチケットのために駆けずりまわっているときも、いろんな人と挨拶する。みんな彼がサッカーをしていた事、怪我のことまで知っているらしい。それにしても今、イタリアのペルージャにいる中田は有名だ。私を日本人と見てとると、道端から

「ナカター！」

と声がかかる。そして中田の話になると、奴はすごい、カズより優れている、とみんな興奮気味に言う。

いやー、今日は夕方から随分と駆けずりまわった。あ、夕飯食ってないや。まあいいか。もう寝よ。ヤモリが天井にいる。手をパンと叩いたら落ちた。音で動揺してやんの。変なの。

7.4 プロモ山経由バリ島行き

7.4.1 プロモへのバス 1998年12月30日(水)

3時ごろ、モスクからの放送がうるさい。ニワトリにも起こされる。うー、寝かせてくれー。ここの人たちは平気なのかねえ。7:00ごろに下へ降り、チェックアウトをした。椅子に座って待っていると、7:15ごろ迎えが来たので、宿の彼と握手して別れた。1月2日にまた戻ってくるよ。

車は前のボロブドゥールに行ったときと同じサイズだ。先に日本人の女性が一人乗っていた。出発してからさらに途中で3人(男性1人、女性2人)を乗せ、ツアー客は計5人となった。日本人の彼女はプロモだけで、私を含めた他の4人はプロモの後バリまで行く。プロモまでの彼女の名前はYさん。結婚しているそうだが、旦那は来てないらしい。車中、2人でずっと旅話で盛り上がった。彼女もいろんなところに行っているそうだ。9時ごろ小さい売店で1回休憩。12時ごろにレストランで止まって昼飯。誰かと向かい合っただけの食事は久しぶりだ。1時間後、バスは出発した。旅話は尽きない。インド、韓国、中国、トルコ、チベットの話などなど。

16:00ごろ休憩。ガソリンとトイレ。この休憩前から、車のエアコンが効きすぎてちょっと寒い。運転手のおじさんに言って切ってもらった。おじさんに英語は通じなかったが、Yさんが

「ディギン。」(寒い)

と言ったらわかってもらえた。でも走り出してしばらくすると暑くなった。外は雨、また雨。対向車線を使って前の車を追い越し、ぶっ飛ばしまくる運転手のおやじ。17:00ごろ休憩。まだ着かないのか。車は山道を登って行き、18:40ごろ、ようやく今夜の宿 HOTEL BUROMO に到着した。

お、結構いいホテルだぞ。ロビー兼食堂がきれいだ。そこで彼女は明日の帰りのジョグジャ行きが7:00pm発だと知る。我々は9:00am発クタ行きだ。明日、彼女はものすごく暇になってしまい、なにをして過ごそうかと途方にくれた。

夕飯はYさんとテーブルを共にした。私はFried RiceとBINTANG Beerを頼んだ。ビールは前に飲んだモンドセレクション金賞受賞のHari Bai Beerよりうまかった。旅話はまだ尽きることがない。インドで出会ったという子連れ夫婦の話、旅先でバツリ話、会社勤めと旅行の話、ガルーダのトラブル経験談などなど。話を聞いていると、私も1か月ぐらいの長期旅行(人によっては長期じゃないけど)をしてみたいと思った。楽しい夕

食だった。19時から21時まで話し通しだった。途中、彼女が注文したベジタブルスープが来なかったので、厨房に言ったら忘れていたみたいだった。でものんびり待ちましょ。いいじゃないですか(他人事?)。食事後、彼女は明日用のお茶やおにぎり、フルーツを用意したりしていた。さすが女性だなあ。うーん、旅慣れてる。とても面白い人だ。

今日は移動で1日終わってしまった。明日は3:30出発だ。とても寒い。早く寝よ。

7.4.2 プロモ登山とバリでの年越 1998年12月31日(木)

3:00起き! 早えー。ホテルの人のドアノックで起こされた。3:30、ジープに7人+運転手が乗って出発だ。え、ジープ代って別料金なの? 彼女はツアー料金に全て含まれてると聞いていたので金が足りないそう。私も貸すだけの金がない。彼女はドルからの両替などを試みた。でもホテルの兄ちゃんはUS\$100じゃないと両替できないと言う。そんなバカな。朝早くて頭が働かないんで、計算できん。兄ちゃんが値段を繰り返す。ん? セブンティーン サウザンド アンド…。サウザンド? 1万7千…あ、なんだ、思ってたのと1桁違うじゃん。払えた。やっぱり朝は頭がまわってないな。

まだ真っ暗な中、30~40分ほどかけてView Pointへ。ジョグジャから一緒の車で来た男の男の人は途中で降りた。別のところを見に行き、後で合流するそう。彼は深い霧の中に姿を消した。道は深い霧だ。そして寒い。View Pointでは、上へ行くと結構人がいた。霧と雲で何も見えない。5:00ごろになると、太陽が姿を見せ始めた。まわりの人々の歌声。歓声。山は霧がはれたり、またかかったり。日が出たら、たくさんいた人々はサーツといなくなった。彼らは日の出を見るのが目的だったのかな? 霧と雲で、目的の山の景色は全く見えない。一瞬、霧が薄くなったときに山の輪郭が少し見えたが、すぐにまた霧がかかってしまった。展望台には山の名前が書いてある絵のプレートがあったが、実物は真っ白な霧で全然わからない。晴れていれば、いくつかの山が連なっていて一番高い山が噴煙を上げているのが見えるそう。

人が少なくなってからも、彼女が山の写真を撮り逃していたのでしばらく霧がはれるのを待った。でもだめだった。私が撮った写真もちゃんと写ってるかどうか怪しい。

車へ戻ると、客の男の人に

「We lost time.」

と不機嫌そうに言われた。またツアーのいやなところだ。そんなこと言わないでゆっくり見せてよ。あんたたち、引き揚げるの早すぎ。私たちが乗り込んだ後、車はプロモ山へ。途中止まったところでは小さなラズベリーが生えていて、採って食べてみたりした。プロモ山の麓へ着いて車から降りると、まわりは馬だらけだ。乗らないかとしきりに誘ってくる。ここでの観光は1時間の予定だ。

上まで登るのは結構きつかった。息が切れた。火口では強烈な硫黄の臭いがする。だがいい景色だ。空はすでに晴れ上がり、青空だ。今展望台へ行ったら良く見えるかもしれないなあ。しかしあのべたべたカップル(さっき不機嫌に文句を言った人)はタフだな。休みもせずどんどん登っていた。十分に景色を眺めてから山を降り、麓のヒンドゥー寺院へ行ってみた。扉は閉まっていた。入れないのかとちょっと諦めかけたが、見ると鍵はかかっ

ていない。扉を開けてみた。すると鉄の扉なので「ガチャン！」と音がして、その音を聞いて中から男の人が出て来た。《あ、怒られる？》と思ったが、入ってもいいかと聞いてみると、インドネシア語で何やら言われた後、

「Buddha?」

と聞かれた。そうだと答えると中へ入れてくれた。おおー、良かった。思い切って開けてみるもんだ。男の人はコリアンやジャパニーズは仲間だというようなことを言ってくれた。でもこっつてヒンドゥーなんだよな。ブッダはヴィシュヌの化身のひとつということだから、仏教徒⁴もヒンドゥーの仲間という感覚なんだろう。でもインドでは、入れてくれないヒンドゥーの寺院ってあったよなあ。静かな雰囲気の中、彼の後ろについてYさんと一緒に奥まで行き、線香を渡されて座った。そしてその男の人は祭壇の前でお祈りをしてくれた。とても嬉しかった。

ジープで帰る途中、彼女はバナナを買った。何やら交渉していたが、男の人にもうちょっとちょうだいと言っているようだ。最後に1本もぎ取って

「Thank you!」

と言って、スッと男の前を離れた。売っていた男は《なにすんねん》という表情をしていたが、彼女のたくましさが見えて面白かった。なかなか図太くていいねー。

宿へ帰り、8:00 ごろトーストとコーヒーの朝食。コーヒーのカップの底には挽いた豆が沈んでいた。インスタントじゃなかった。しかし瀧さないのかな。それともこの辺ではこういうスタイルなのか？ 8:30 に部屋に戻り、荷物の整理。8:40 に部屋を出た。支払を済ませた後、彼女からバナナをもらった。

最後に握手。楽しかった。お元気で。バスに乗る時、先に乗っていた旅行者に

「あれ？ あなた、今発つの？ 荷物は？」

「これだけだよ。」

ヨーロッパからの旅行者と会ったときのいつものやりとりだ。旅行期間の違いもあるかもしれないが、彼らと私とでは荷物の量に相当の違いがある。「これだけ」と答えると、みんな「ほほー」という顔をした。

9:00、彼女に見送られ、バスは出発した。30分から1時間ほど走って山を降り、来る時に寄った車庫へ。そこで20人乗りの大きなバスに乗り換えた。でもこのバス、エアコン効かないぞ。11:50、昼飯。ミーゴレンがうまい。12:30 出発。もう眠ることしかない。誰も喋っていない。

13:50、現在パラパラと雨。さっき、宿にペンライトを忘れたのに気づいた。この旅は緊張感がないせいか、気が抜けてる。あれは小五の時、転校する私に池田君がくれたものだ。まさかインドネシアに置き去りになる運命だったとは…。うー、この書けないボールペンはイライラする。

バスなしでフェリーへ乗り込む。向こうへ着いてから別のバスに乗り換えるそうだ。フェ

⁴ちなみに私の家は仏教ではなく神道である。厳密には異なる宗教なのだが、私は日本においては仏教と神道はミックスされていると思っている。説明が面倒なので旅行中は大体 Buddhist で通し、Shintoist と言うことはない。落ち着いて話す時間がある場合のみ Shinto について説明することにしている。日本古来の神道の世界観は結構好きである。

リーのデッキから見える景色は、タヒチを思い出させる。ただし天気は曇り。14:50 出港。船上から見るバリ島もタヒチで見た景色にそっくり。タヒチの山の角を削ってちょっと丸みを出した感じだ。さようならジャワ、また明日。静かだ。エンジン音がうるさくない。客はたくさんいるが、現地の人の方が多く、観光客はそんなにいないようだ。出港前には現地の子供たちが船から海に飛び込んで遊んでいた。まわりにはウインドサーフィンをやっている連中もいた。

15:40、バリ島^{ギリマンヌク}Gilimanuk着。船を降りてから時計を1時間戻す。バリタイム 14:46 になった。待合室のテレビでは、何か日本のアニメをやっている。何だっけな … おお！ ガイキングだ！ 古うー。英語吹替えにインドネシア語字幕だった。

16:20、バスが来ない。バスはクタから来る客を乗せたのがここへ来て、それを使うことになっているそうだ。旅行社の彼（野村宏伸似）はジャワの人で、この遅れはバリのスタッフのせいだと言う。この人は良さそうな人なんだけどな。ジョグジャからのバスと一緒にだった客のお姉さんは、遅れていることを彼に向かって怒っている。彼と少し話した。彼のお母さんは Chinese。兄弟が1人いて、神戸、大阪あたりにいるという。

後 30 分ぐらいで来るそうだが本当か？ クタへの到着は 21:00 ごろになるようだ。まずい、もう帰りの飛行機のリコンファームができない。バスは 16:45 にやっと来た。

| | | | | | | | | | | | | | {

クタでは海岸沿いの通りへ出る予定だった。私はしばらく眠っていたのだが、起きてみるとなんだか様子がおかしい。やけに角を曲がるなあと思っていたが、同じところをぐるぐるまわっているようだ。道が入れないなどと言っていたが、どうやら単に道に迷った様子だった。

我々4人の客対3人のツアー会社の人という感じで、バスの中でけんかのようになってしまった。すっかり目が覚めてしまった。O±ceへ電話しろと言ってももう閉まっていると言うし、New Year で道が通れないならなぜそれを知らなかったんだと聞いても、わからないという答え。なんなんだコイツら。最後はこっちで道の看板やら町の人やりに情報を得て、運転手を誘導する始末。どこにも通行止めなどなかった。町中は人々がラッパを持ってブーブー吹いていて、とてもにぎやかであった。なんとか海岸沿いの通りに出て、人ごみの中、バスを降りた。腕時計を見ると、もうすぐ 23:00 だった。

バスを降りてから彼ら3人とははぐれ、私は一人でうろうろと宿探し。ポピース II という通りへ行き、適当に宿をあたる。ない。FULL、FULLの嵐。もう選んでなどいられない。見かけた宿に片っ端から入り、聞きまわる。New Year を迎えるので、観光客だけでなくジャワの人々もたくさん来ていてこんなに混んでいるのだ。日本人かと聞かれ、そうだとするととても残念そうにしてくれるところも多かったが、やっぱり部屋は空いていない。

それにしてもうるさい町だ。今日は New Year で特別だからこんなに騒いでうるさいのかな。もう何件まわったのかわからなくなった。ちょっと座って休憩し、他の通りも当たってみたがだめだ。聞き込み調査の刑事みたい。何件目かを断られた後、ジョグジャ、プロモと一緒にだった3人と道で再会した。彼らは大きな荷物を抱えて歩いていた。お互いにと

ても疲れた様子だ。彼らも泊まるどころがどこにもないと言う。宿は4人でシェアすれば安くなるから、一緒に行こうということになった。時計を見るともう1月1日になっている。気づかなかった。宿がないまま、歩きながら新年を迎えてしまったのだ。苦笑しながら、お互いに

「Happy New Year!」
と言い合った。

7.4.3 野宿 1999年1月1日(金)

とりあえずある宿のロビーで落ち着いて、これからどうするかみんなで考えた。当てにしていた、ちょっと高めのこの宿もFULLだそう。別の安宿街へ行くにはもう疲れすぎている。このロビーで寝る訳にも行かない。みんなお腹が減っていたので、とりあえず食べてから考えようということになった。荷物だけはここに置いてもらえるそうなので、荷物を預けてみんなで飯を食いにいくことにした。

だが、レストランは軒並み閉店。そして開いているところも凄まじく混んでいる。尋常じゃない行列だ。仕方ない、屋台に行くか。海岸の通りに並んでいる屋台を眺めて歩いた。あんまりうまそうなのがないな。歩いているうちにいつの間にかまた一人になっていた。チキンと玉子が載ったご飯があったので、頼んでみた。一皿できあがった後、受け取っていくらだと聞くと、Rp20,000とか抜かしやがる！なにー！しまったと思った。うっかり、注文する前に値段を聞くのを忘れていた。しかし高すぎる。ちょっと上乘せしたというレベルの値段ではない。桁が違う。値段を言ったときのこいつの表情からしても、ボッタくろうとしているのがわかる。近くにすわっていた人に、

「こいつはこれがRp20,000だと言ってるんだけど、信じられん。おかしい。高いと思わんか？」

と聞いてみた。聞かれた兄ちゃんは困った顔をして、

「すまない。わからない。」

と答えた。ええー？高いはずだ！おい！一言「高い、おかしい」と言ってくれ。やっかいな事に巻き込まれたくないから知らないふりをしてるのかな。ええい、仕方ない。私は奴に

「悪いけどこれキャンセル。」

と言い放ってとっととその屋台を離れた。後ろから

「ヘイ！待って！OK、OK...」

と奴の声が聞こえたが、そんなのもう食う気がしない。振り返らないでその場を去った。

さて、どうしよう。バスで一緒だった男の人が屋台の前で座っていたので、自分も合流した。焼きそばの屋台だ。あんまりうまそうではなかったが、まあいいかと思って注文した。今度は値段を確かめて。となりのジュースの屋台でSpriteを1本買おうとすると、Rp5,000だと言う。またボッタくりだ。高いよと言うと、

「日本人か？日本人はフレンドだ。」

と急に笑顔になって、Rp2,000になった。それでもまだ高いんだけど…まあ今までより

大したことないからいいや。しかし、ここでは全ての屋台がボッタクロうとしてくる。大観光地なのは良くわかるが、とても感じが悪い。

焼そば屋台の兄ちゃんと話している彼の横に私も座った。屋台の兄ちゃんをよくしゃべる。声がうるさい。ちょっと黙っとれコラ。しばらくするとさっきまで一緒だった2人の女性も合流して、そこへ座り込んだ。

粗末な夕食を食べつつ、女性の1人が

「そう言えば、あなたの名前聞いてなかったわね。」

と言ってきた。そう言えばそうだ。そして、そこで初めて落ち着いてお互いに自己紹介をした。男の人はフィリップ。ベルギーから来ていて、エアラインカンパニーに勤めているそう。この後は中国に行くという。2人の女性はクレア、キャシィ。2人ともイギリス人。この3人は一緒に旅に出た訳ではなく、途中で会って行動を共にしているだけだそう。フィリップと私はビールを飲んだ。4人で

「Happy New Year!」

とピンを鳴らした。なにか苦勞を共にした仲間という感じだったので、打ち解けることができた。

食べ終わった後は屋台を離れ、フィリップと2人で地べたに座ってビールを飲みながら旅話をした。彼はスラウェシ島にも行ったそう。独特の風習のあるところで、とても面白いそう。行って見たいなあ。それから、カンボジアのアンコールにも行ったことがあるそう。アンコールのあるシェムリアップは東南アジアで最高の場所だ！と意見が一致したりもした。今日は寝ないで、この海岸で1晩明かそう。しかし、うるさいし、酔っ払いが多いな。

しばらくすると、ある酔っ払いがフィリップに声をかけてきた。奴は私たちの前に座り込み、いい店があるとか、女はどうだとか言いはじめた。やばい。こいつ、目がイってる…。フィリップは相手を刺激しないように、奴が言うことを軽く受け流していた。ちょっとでも怒らせたら大変なことになりそう。奴は完全に酔っ払っている。もしかしたら何かクスリをやってるかもしれない。私はこの危険な雰囲気居たたまれなくなってしまった。なんとかこの状況を脱しようと思い、ある花火が打ちあがった瞬間に、スッと立ち上がった。いかにも花火に興味があるそぶりで、ちょうど奴と向かい合ってるのと反対方向になる花火の方を見た。そのとき奴が

「おい、どこ行くんだあ。」

と言ったのでちょっとドキっとしたが、何も起こらなかった。良かった。フィリップが、どうした？ という感じで立ち上がって私と同じ方を見た。しばらくすると、奴は何も言わずに立ち上がってフラフラとどこかへ行ってしまった。ふうー。

フィリップが、

「ここはヤバイな。荷物のある宿に戻ろう。」

と言ったので、ここで1晩明かすのはやめて戻ることにした。

結局、外で寝る場所を探して4人で寝ようということになった。私は寝袋を持っていないので、フィリップが敷くものを貸してくれた。2人の女性が準備している間に彼と話をした。

「日本というのは俺たちヨーロッパの人間にとってとても興味のある国なんだ。日本はとも変わった文化⁵を持っている。柔道、空手、それから、あの計算機…なんて言ったっけ。」

「そろばん？」

「そうそう、そろばん。」

「柔道は高校の授業でやったことあるよ。あんまり強くなかったけどね。」

「そろばん使える？ あれはどうやって計算するんだ？」

「そろばんは最近の日本人は使わなくなってるよ。」

「電卓？」

「そう。今は電卓。そろばんは今は学校でも教えないしね。私もそろばんはできないよ。」

「あれはどうやって計算するのかわかる？」

「そろばんはビーズが並んでいて、一列のうち一番上は5で、その下の4つはそれぞれ1を表してるんだ。そろばんを使う人は、実際にそろばんが無くても頭の中にそろばんのイメージを持っていて、暗算できるんだよ。」

「ふーん、頭の中でビーズを動かす訳か。」

「そうそう。」

彼は1度だけ日本に行ったことがあるそうだ。全てがとても高かったと言っていた。そうだろうなあ。多分東京ってのは世界で物価が一番高い都市なんじゃないか？ それに、成田空港にある店の値段ってさらに高いからびっくりしたでしょ。

そんな話をしているうちに後の2人が来たので、4人で寝る場所へ歩いた。さっき宿探しをしている時に寝られそうなところを見つけていたらしい。旅慣れてるなあ。道は雨で濡れている。ある道の角のところに、下がコンクリートで、屋根のあるところがあった。柱は、例の政党の赤と黒の模様に塗られている。屋根の下には何も無い。選挙のキャンペーンなどで使う場所かな。ジヨグジャにあったヤグラと同じようなものだろう。3人はここをキオスクと呼んでいた。そのキオスクに4人で並んで横になった。

「今日は大変だったね。」

「New Year をこんなところで迎えるなんてなあ。」

「New Year にこんなところで寝るなんて最低だわ。」

「あー、来年はきちんとした服を着てシャンペンのある New Year を迎えたいわ。」

「暖かいベッドもね。」

「そうだね、あははは。」

みんな最悪というようなことを口走っているが、私は内心ちょっと楽しかった。野宿するなんて初めての体験だったからだ。それに1人じゃないから安心だ。苦勞を共にすると、仲良くなれる。

すこし雨が降っている。バイクがけたたましい音を立てて目の前を通りすぎる。猫もうるさい。横になってそれほどたたなうちに、あるバイクの集団が「なんだ、あいつら」と

⁵彼はここで「strange」という単語を使ったが、すぐに言い直した。strangeと言われたことよりも、言い直したことがちょっと気になった。別に腹が立った訳ではないが、strangeというのが本音なのだろう。ヨーロッパから見ると、日本文化は相当奇妙に映るんだろうなあ。

いう感じでこっちに近づいてきた。キオスクの前にバイクを止め、すぐ側に来て座った。
「ここで寝るのか？」

もう半分眠っていたので、ほとんど話をする事もなかった。だが彼らはしばらくそこに居てしゃべっていた。さっきとちがって全然危険な奴らではない。でもうるさい。用もないのにこんな近くに座ってしゃべんなよ。クレアさんが咳払いをした。するとごめんごめんと言ひ、しばらくして去ってくれた。しかしそれからもしょっちゅう別のバイクが通り過ぎる。猫もうるさい。シーツと言って追い払ったりした。

バリ島では伝統芸能を楽しんだり、ビーチで寝転がって日焼けでもしようと思っていたが、結局そんなことは全然できなかった。「バリ島で年を越した」などと言うととても優雅に聞こえるが、その言葉の印象とはえらく違う現実であった。

| | | | | | | | | | | | | | {

結局ほとんど眠れなかった。5:50に起き、6時に荷物を取りに4人で宿へ向かった。

荷物を担ぎ、とりあえず4人でカフェへ。あまり食べる気はしなかったので私はコーヒーだけ注文した。今日もまた雨だ。「ビーチで日焼け」どころではない。雨宿りも兼ねて、しばらく彼らと話をした。プロモで一緒だったYさんと私はカップルだと思われていたようだ。だからプロモからここへ来るバスに乗るときに、私に今幾つのかと聞いたのだそうだ。ジョグジャからのバスでも、2人で彼らの前に座ってずっとしゃべってたからなあ。Yさんは結婚してるというと、クレアさんから

「じゃあ、彼女は何で1人で旅行してるの？」
と言われた。結婚してる女性が一人旅っていうのはやっぱり不思議なのかなあ。クレアさんは何やらポストカードを書いていて、マイ・スイートハートにどうたらこうたら…と話していた。相手はいるらしい。内心、《じゃあ、あなたたちはどうなの?》と思ったが、聞くのは止めといた。

彼女たち2人はバリ島の別の場所へ行ってみるそうだ。私とフィリップはデンパサールへ行き、ジャワへ戻ることにした。私は帰らなければならないからなのだが、フィリップはなんでもう帰るの? ここがよっぽど面白くないところに思えたのかな。

「Have a nice trip!」

彼女たちと別れ、8:30、フィリップとベモコーナーへ。すぐ見つけられた。待たずに乗れてよかった。料金は2000ルピア。デンパサールのベモ・ステーションに着いてから、彼は先にバスターミナルのあるウブンへ。私はバリ博物館へ行ってみようと思い、博物館まで歩いた。

途中、商店街などをみてまわった。閉まっている店が多いのだが、ちょっと裏へ入ると、きれいな布を売っている店がずらーっと並んでいる通りなどがあつた。途中でテレホンカードを買ってSQへ電話。かかったと思ったら、テープの音声だ。早口のインドネシア語の後、早口の英語。電話番号のような数字を言われ、電話は切れた。さっぱりわからない。何度かかけなおして同じ音声を聞いたが、よくわからなかった。多分今日は休みですというようなことを言っているのだろう。言われた電話番号をメモしてかけてみたが、全然からなかったのだから、あきらめた。

博物館は閉まっていた。がっかりだ。元旦だからか。でも観光客のために開けといて欲しかったなあ。展示は見られないが、敷地内へ入ることはできた。そこで面白い兄ちゃん登場。いい奴だった。日本語がうまいが、博物館の人ではないそう。座り込んでしばらく話をして時間をつぶした。彼の知り合いらしいおみやげ売りの兄ちゃんも横に座って、笛を吹いてくれたりした。別にお金を要求されることもなく、楽しい時間を過ごした。

博物館を後にし、歩いて再びベモ乗り場へ。そこで昼飯にした。まずいー。え、これがナシチャンプル？ うそ。ご飯の上にサテが載っていて具はちょこっとだけ。でもご飯は多めだ。

飯の後しばらくしてからベモに乗り、ウブン・バスターミナルへ。12人も乗った。料金は1,000ルピアだ。安い。早く着きすぎたな。2時間ぐらい暇だぞ。ぼけーっとする。またバスの来るのが遅い。15:10ごろやっと来た。乗るとチケットのチェックをされたが、私の名前が名簿にないようだ。まったくどうなってんだよ。これ、ジョグジャで買ったチケットだから、連絡行ってないのかな。結局、チケットの再発行みたいなことをされた。金は取られなかったが、新しいチケットを渡された。

前の席に小さい女の子3人。そのうちの1人は私の隣の女の子(若いけどお母さん?)の子供のようだ。目を閉じて寝ていたら、バスはいつの間にか出発していた。パンと水を渡されて起きた。バリからジャワへ渡った後は、時計を1時間前に戻す。夜になり、22:30ごろ夕食。セルフサービスのご飯だ。自分で好きなだけよそった。TEA付き。結構うまかった。

しかし、私はバリに何をしに行ったんだろう。ほとんど何もしていない。

7.5 長い帰り道

7.5.1 さようならジョグジャ 1999年1月2日(土)

8:00ごろジョグジャのバスターミナルに到着。8:20ごろ Prastha Jaya に帰ってきた。懐かしの我が家という感じだ。今度はルーム10。宿には他に誰も客がいないみたいで、静かだ。さっそくシャワーを浴びる。気持ちいいー。そして、その後はしばらくベッドで眠った。もう出発までただ眠るだけだ。

午後までたっぷり眠って、15:50に宿を出た。車までは彼が見送りについて来てくれた。

彼と固い握手を交わし、

「Selamat tinggal.」(さようなら)

物足りなく思っていたこの旅の中で、輝いている部分があるとしたら、彼との出会いをおいて他にはない。元気でな。本当に世話になった。そして車は出発した。さようならジョグジャ。

車はいくつかの宿に寄り、何人が客を乗せていく。みんなジャカルタへ行くのだろう。しかし外国人旅行者らしいのは私だけだ。しかし寒いー。これは修行か？ サービスのつもりだろうが、冷風直球ストライクゾーンだ。おかしいんじゃないの？ 調節ということに価値を見出さならしい。冷房MAXである。おっさん、飛ばす飛ばす。追い越す追い越す。

20:20に休憩。21:05、出発しようとしたら右うしろがパンク。おっさんは取替えにかかった。そして21:20発。21:30停まる。パンク修理するおっさん。なんだ、どうなってんの？

7.5.2 ちょっとだけ市内観光 1999年1月3日(日)

4:00休憩。7:00ごろジャカルタに着いたようだ。車は、客をそれぞれの望みのところで降ろしてまわった。各家をまわり、最後に私だけが残った。私が言う前に運転手の方から、「ジャラン・ジャクサ？」

と聞いてくれたので、そうだと答えた。8:10にジャクサ通りに到着。Bloen Steen Hostelに入る看板のあるところで降ろしてもらった。運転手さん、お疲れ様。宿の兄ちゃんに、ここに忘れた寮の鍵のことを聞いてみた。私が泊まっていた部屋には何もなかったと言う。客の忘れ物もいくつか見せてくれたが、私の鍵はなかった。ここに忘れたんじゃないのか。完全に無くしてしまったようだ。まあいいや。兄ちゃんに、今日もここへ泊まることを告げた。

シャワーを浴びてしばらく眠った後、ジャカルタの町をぶらぶらしようと思って外へ出た。近くで飯を食った後、独立記念塔へ。行列に並び、ぎゅうぎゅう詰めのエレベータで上へ上がった。展望台からジャカルタの町を見渡す。天気は曇りだ。都会なのだが、あまり活気がないような印象を受ける。日曜日だからかな。展望台では、うるさい子供が走り回っていた。

塔を降りてからはサリナデパートへ向かって歩いた。途中、装甲車や軍用トラックが停まっているのをいくつか見かけた。でも特にピリピリした様子はなく、軍人さんはのんびりムードだった。サリナデパートでは、TシャツとインドネシアのCDを買った。どれもちょっと高めだが、品揃えが豊富なのでおみやげをそろえるにはいい場所だ。

ジャクサ通りへの帰り道、一人の男性に話しかけられた。しばらく横に並んで話しながら歩いた。私がジャクサ通りの宿に泊まっていると言うと、彼はジャクサは蚊が多いし、売春女がいるから嫌いだと言っていた。売春はともかく、蚊が多いとしたらジャカルタ全体が多いんじゃないの？ ジャクサだけ蚊が多いって訳じゃないと思うけどなあ。

宿へ戻ってからは、しばらくベッドで横になった。何の感慨もない。名残り惜しくない。曇りの日が多かったので、今回の旅行中「暑い」という言葉は口にしていないと思う。印象が薄い。

ガンビル駅前からダムリのバスに乗り、17:10ごろ空港へ着いた。チェックイン手続きはまだ始まっていない。チェックインカウンタの兄ちゃんは日本語ができた。変なの。初めてだ。空港税が

「ゴマン(5万) ルピア。」

と日本語で言われた。結局リコンファームしてなかったけど、席があってよかった。空港にあると思っていた Post Office がない。松平に書いたポストカードは出せずじまいだ。持って帰って渡してもあんまり意味ないよなあ。まあしょうがないか。職場へのお土産にコーヒーと紅茶を買った。

何の気分の盛り上がりもなく、飛行機はジャカルタを飛び立った。SQの機体はA310だ。

さすがに液晶パネルはない。隣りにモスリムの女性。しばらくすると飯が運ばれてきて、ワインを注いでもらう。やっぱりうまいねー。飯は今回初めてビーフにしてみた。いける。そういえば、こんな肉食ったの久しぶり。20:50、飯の後、上下の揺れ。そして21:30(現地22:30)、飛行機はシンガポールのチャンギ空港に到着した。

7.5.3 帰国 1999年1月4日(月)

次はBOEING777 JUBILEE。1:15発。7:30福岡空港着。降りるのは外だった。タラップに出ると、さむーい。税関出たら8:00だった。

あっさり終わった。思い返してみると、今回の旅で観光の部分はプロモ山で終わっていたことになる。プロモ山の後はひたすら移動するだけだった。トータルで考えても、この旅行期間の約半分は移動時間に費やしてしまったわけだ。何と言っても、デンパサールからの飛行機がとれなかったのが敗因である。最後の移動だけの2日間は、本当に何の感慨もなかった。ベトナム鉄道のような楽しさもなく、ただバスに乗って移動しているだけだった。限られた旅行期間の中で、これは非常にもったいない。まさに失敗である。

それにこの旅は印象が薄い。移動時間が多かったせいもあるだろうが、それだけではないような気がする。旅の間、ずっと物足りない気分が私につきまとった。なぜだろう。強烈な印象を残すものは何もなく、淡々と過ぎた日々。何かが欠けている。インドネシアに対する自分なりのイメージが出来上がっていない。今までのように、旅した国をガッチリと心で捕らえた感じがしないのだ。私のせいなのかインドネシアのせいなのかはわからないが、私は物足りなさを抱えたまま帰国してしまった。つまらなかった訳ではない。だが自分がこの旅に満足していないのは事実だ。

それでも、インドネシアは広い国だ。今回見た土地とは異なる文化を持つところがたくさんあるだろう。また行ってみなければならぬと思う。今度はスラウェシ島あたりに。

明日から会社だ。短い休みだったな。この物足りない思いの中でも、インドネシアの中で心に残る土地はあった。今私の頭には、ぼんやりとジョグジャの街角が思い浮かんでいる。